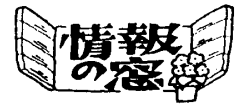
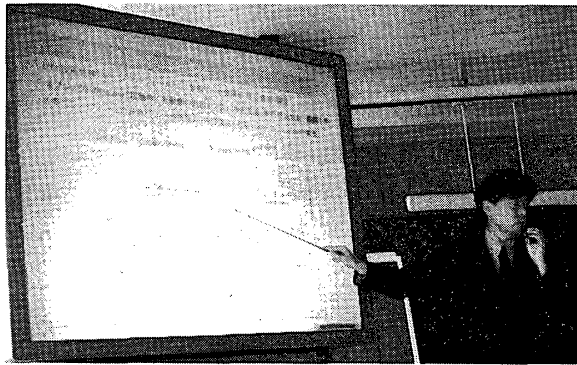


第 11 回企業事例交流会ルポ



高橋正子 (慶應義塾大学)



発表風景

2003年日本オペレーションズ・リサーチ学会春季研究発表会の初日3月18日午後、第11回企業事例交流会が慶應義塾大学理工学部（横浜市）で開催された。

企業事例交流会は研究発表会と同時に開催しているが、研究発表会のセッションとは異なる趣旨の下に行われている。企業事例交流会は企業のOR実務担当者にORの実施例一問題の発生からさまざまな苦勞を経て解決に至る苦勞話などを、研究発表という形式ではなくORの適用事例として発表してもらうものである。企業担当者の報告に対して、対象の事例に精通した研究者のコメントを挟み、質疑で締めくくる形式で通例各30分の発表時間となっている。

当日は直前に行われた経済同友会次期代表幹事の北城格太郎氏（IBM APプレジデント（当時）兼日本IBM代表取締役会長）の特別講演が盛況で、交流会会場が講演会場とは離れていたため出席者の出足が心配されたが、休憩をはさんで正味2時間、4テーマの発表に各平均30名ほどの参加者があった。

前半は西川武一郎氏（東芝）の司会で、かつて待ち行列に関する大量の研究発表で学会をにぎわしていたNTTグループからの発表2件に、事例に精通しているのみならず発表企業にもゆかりのあるコメンテータを配して内容を掘り下げるプログラムとなった。

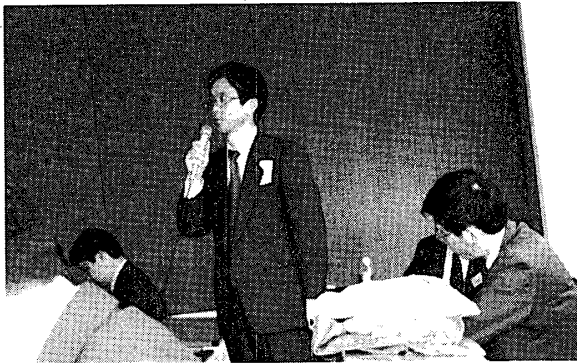
坂田洋幸氏（NTTデータ）の「Legacy連携型分散オブジェクトシステムのモデル化と性能評価」は筑

波大学との共同研究で、近年実用化が進んでいる分散オブジェクト環境に従来サービスを提供してきた既存システム（Legacy）を取り込んだ統合サービスを実現するための相互連携問題を扱ったものである。NTTデータでは開発対象、対象ターゲットともに企業のマル秘事項で大量にデータがあってもなかなか発表に至らない（川島幸之助コメンテータ（東京農工大））のだそうだが、技術性能もさまざま膨大なソフトと近年の新しい技術とを如何に統合していくかという問題は非常に普遍的で、シミュレーションから解析モデル化、制御への適用が事例として後日発表されることを期待したい。

徳久正樹氏（NTTサービスインテグレーション基盤研究所）の「光MPLS網のパス設計について」は、ネットワークにおけるパス設計を非線形整数計画問題として定式化に取り組んだものである。伊藤大雄コメンテータ（京都大）からは、解空間の限定に疑問が出され、ローカルサーチを効率的に行うこと、さらに最近大規模問題においてもかなりよい解が得られているタブーサーチを適用することの提案とかなり具体的なコメントが行われた。問題が既にかなり整理されているので、これから一流国際学会での発表が可能な研究にもステップアップが期待できそうである。

後半は相澤りえ子氏（構造計画研究所）の司会で生産管理に関する発表が2件行われた。どちらも具体的な事例で問題の発生から実務担当者の苦勞がしのばれる興味深いものであった。

実際に現場の問題を扱いながら社会人ドクターの学位取得の経験がある石井信明氏（日揮）の「生産管理システム再構築の留意点」ではさまざまなクライアントに対する経験から問題を整理したもので、とくに多種多様な現場や関係部署をまたぐ改革の難しさが問題としてあげられた。これは、エリヤフ・ゴールドラットの最新ビジネス小説（日本語訳として）「チェンジ・ザ・ルール！」（ダイヤモンド社）で言うところの、最新ERPを入れても仕事の仕方・慣習を変えないと役に立たない（圓川隆夫コメンテータ（東工大））



川島幸之助コメンテータ



会場風景

ことに対応する現実を実証・再認識させるものであった。

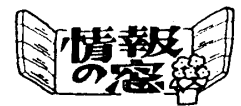
宮下隆氏（コマツ）の「ライン単位の効率的な生産から工場全体最適生産へのアプローチ」は自社工場のひとつを例に、変種変量生産に対応するために、素材加工から組立出荷までを統合した生産物流シミュレーションを試みたものである。シミュレーションデータの積み重ねから全体としてどのように最適化を導入していくか（今泉淳コメンテータ（東洋大））がこれからの課題になっている。

発表全体を通してみると、個々のシステムのみならず企業経営全般において、「分散と統合」が課題とされていることがよくわかる企業事例交流会であったよ

うに思う。1発表30分の時間では、フロアからの質問は1つに限られてしまい、どれも討議に至ることはできなかったが、休憩時間や終了後に、発表者やコメンテータを囲んでの交流がいくつも見られていた。

ORは実践で効果が出てこそ検証ができるのであり、実際のORの適用事例の発表を通して企業と研究者との交流を図るのを目的としている企業事例交流会は、研究者にとっては問題を見出すよい機会となる。また、企業のORワーカーにとっては単に交流のみならず、事例発表から、その道の研究者の具体的提言を得てジャーナル論文に仕上げ、社会人ドクターへのステップにもなる機会と考えられる。どちらにとってもこのような事例交流会への積極的な参加が望まれる。

3 大学による「問題発見とモデル化」 プレゼンテーションの試み



吉瀬章子（筑波大学）

東京工業大学経営システム工学科では約20年間、また筑波大学社会工学類経営工学専攻では約15年間、それぞれの3年次の実習において「問題発見とモデル化」の課題を課している。「対象は何でもよいから、各自が興味をもつことに工学的なアプローチを用いて提案を行え」という課題だが、テーマの多様さ、解析方法の独自性、プレゼンテーションの懲り方など、大学内部で留めておくには惜しい内容もあり、平成7年より相互の大学で数名の学生を派遣して、交流発表会を行ってきた。今回その試みの延長として、平成15年OR学会春季発表会実行委員会のご理解を得て、会場近くの教室をお借りして、慶應義塾大学管理工学科

の学生を含む、3大学による発表会を開かせて頂いた。

日時：3月19日 12:30~15:15

発表者（所属）とタイトル：

伊藤晃典（東工大）

「スーパーマーケットへの小口専用レジ導入における効果の検証」

本間裕大（慶應大）

「料金所ETC化による渋滞緩和効果の評価」

大村鐘太（筑波大）

「ゲーム01における最適戦略」

高橋大地（筑波大）